

## Revenant Ballad と昔話

美濃部京子

### Revenant Ballads and Folk Tales

MINOBE, Kyoko

#### 1. はじめに

バラッドに現れる幽霊を言い表す言葉として、英語では“ghost”にかわって“revenant”が用いられることがよくある。“Revenant”とは「戻ってきた人」という意味から派生した「幽霊」を表す言葉であるが、バラッドの幽霊は不特定の人間に対して現れるのではなく、生前親しかった人のもとへ幽霊の姿となって戻ってくるというものが多い。また、その姿も、その幽霊に出会った人が幽霊であると思わず話しかけるなど、あたかも死んだ人間が生きた肉体を持っているかのように描かれることが多いため、この語が用いられるようになっているようだ<sup>1</sup>。

Würzbach と Salz の *Motif Index of the Child Corpus* によると、revenant が現れるバラッドとして 16 のバラッドがあげられているが<sup>2</sup>、このうち、何らかの形で昔話あるいは伝説との関係が指摘されているものは、“The Twa Sisters” (Child 10)、“The Cruel Mother” (Child 20)、“Proud Lady Margaret” (Child 47)、“Fair Margaret and Sweet William” (Child 74)、“Sweet William’s Ghost” (Child 77)、“The Unquiet Grave” (Child 78)、“The Wife of Usher’s Well” (Child 79)、“Young Benjie” (Child 86)、“Sir Hugh, or, The Jew’s Daughter” (Child 155)、“James Harris (The Daemon Lover)” (Child 243)、“The Suffork Miracle” (Child 272)の 11 である<sup>3</sup>。

この 11 のバラッドのうち “The Twa Sisters” については他で論じたので<sup>4</sup>、本稿ではそれ以外のバラッドについて扱うことにする。これらのバラッドのうち、恋人の幽霊が現れるものが、“Fair Margaret and Sweet William” (Child 74)、“Sweet William’s Ghost” (Child 77)、“The Unquiet Grave” (Child 78)、“James Harris (The Daemon Lover)” (Child 243)、“The Suffork Miracle” (Child 272)の 5 つ、子どもの幽霊が現れるものが “The Cruel Mother” (Child 20)、“The Wife of Usher’s Well” (Child 79)、“Sir

Hugh, or The Jew's Daughter ”( Child 155)の3つ、その他 “ Proud Lady Margaret ” (Child 47) 、 “ Young Benjie ” (Child 86)がそれぞれ、兄、妹の幽霊が現れるものである。それでは、それぞれのバラッドと昔話・伝説との関連について順にみていくことにする。

## 2 . 恋人の幽霊

バラッドでは恋人同士が死んでからもそれぞれ茨やバラの木に生まれ変わって枝を絡め合うなど生前の愛が衰えないことを歌ったものが多いが、幽霊の話でも死んだ恋人が残された恋人のもとを訪れるものが多い。ここではそんな中から昔話との関連が深いものから順にみていきたい。

### 2 . 1 “The Suffork Miracle”(Child 272)と AT365

バラッド “The Suffork Miracle”は、Antti Aarne と Stith Thompson の *The Types of the Folktale* <sup>5</sup>にもその言及があるし、Morokoff や Taylor も国際話型の 365 「死んだ花婿が花嫁を連れ去る (レノーレ)」と同話型であると認めている<sup>6</sup>。また、Stith Thompson の *Motif-Index of Folk-Literature* では E.215 “The Dead Rider”というモチーフ番号のもとにこのバラッドへの言及がある。この話は話型のタイトルにもあるように、ドイツの詩人 Gottfried August Bürger による物語詩 “ Lenore ” として有名なものである<sup>7</sup>。

ある若者が農家の娘に恋をして報われるが、それに反対する娘の父親は娘を叔父の元へやってしまう。やがて若者は死んでしまうが、1か月後、叔父の家にいる娘の元に現れる。娘の父親の馬に乗り、母親の乗馬服を持っているのをみて、父親の許しがあったと思った叔父は娘が若者と一緒に帰ることを許す。途中頭が痛いという若者に娘は自分のハンカチを巻いてやる。家に帰り、若者は馬を置きに行っただけ戻らない。父親は娘の話聞いて驚く。後日若者の墓をあけると、娘が巻いたというハンカチが土に変わりかけた死体の頭にあった。真実を知った娘はその後まもなく死んでしまう。以上がこのバラッドのあらましである。

Child は、このバラッドはおそらく既成の話をもとに作られたもので、幽霊が現れる動機があいまいであるし、このバラッド自体にはそれほど価値は認めないが、注目すべき昔話 (伝説) やヨーロッパに広く伝わる最も印象的で美しいバラッドのひとつの類話としてイングランドの代表的なものであるとして自らの選集に収めている<sup>8</sup>。そして、ヨーロッパを中心に多くの昔話やバラッドの類話をあげている。

Briggs はこの “ The Suffork Miracle ” を幽霊に関する伝説としてバラッドの要約を *A Dictionary of British Folk-Tales* の Part B, vol.1 に収めている<sup>9</sup>。同書には話型 365 の類話として、他に “ The Lovers of Porthangwartha ”、“ The Spectre Bridegroom ”、“ The

Fair Maid of Clifton”、“Yorkshire Jack”の4話をそれぞれ伝説としてのせている<sup>10</sup>。このうち“The Spectre Bridegroom”はChildも紹介しているが、コーンウォールに伝わる話であり、HuntもBürgerの“Lenore”との酷似を指摘している<sup>11</sup>。農夫の息子Frankは母親の女中であるNancyと恋に落ちる。これに反対した両親はNancyを親元に帰すが、その後もふたりは会い続ける。その後Frankは船でインドへ行くことになり、連絡のないまま3年が過ぎる。ハロウィーンの夜にNancyは女友達に誘われて、麻の種を用いた占いをし、恋人の姿を見せてくれるように願う<sup>12</sup>。そこでFrankの姿が現れるが、ひどく怒った顔をしているので、Nancyは驚き、大声を上げるとその姿は消えてしまう。その後Frankの乗った船は難破し、Frankも死んでしまう。葬式の夜、馬に乗ったFrankがNancyを迎えに現れる。途中でおかしいと思ったNancyは道ばたの鍛冶屋に助けを求め、服を強くつかまれていたので、そのまま墓地まで引きずられて行く。墓地に着いて馬が止まったところで、鍛冶屋が服を焼き切り、Nancyを両親の元へ連れ帰るが、彼女は夜のうちに死んでしまう。Frankの墓石の上にはNancyの服の切れ端がのっていた。Frankと同じ船に乗っていて生き残ったものの話では、Nancyが占いを行ったその日、Frankは狂ったようになり、魂をからだから抜き取り、娘のいる村まで連れて行かれたことに対してひどく腹を立てていたという。そして自分をこんな目に遭わせた娘を許せないと断っていたというのだ。この話では、死んだ恋人は自分を苦しめるような占いを行った娘を懲らしめるために出てきたという理由が表されている。

同じくHuntが紹介しているコーンウォールの話“The Lovers of Porthangwartha”では、両親から反対された恋人同士が生死を問わず3年後にPorthangwartha(Lovers' Cove)と呼ばれている入り江での再会を誓い合う。やがて男はインドへ旅立つことになり、娘はひとり残される。約束の日が来て、約束の場所に出かけた娘の前に恋人は現れるが、そのうちふたりとも海に沈んでしまう。その後娘の遺体が近くの入り江で見つかり、まだ外国にいた若者もその同じ夜に亡くなっていたことがわかる。若者は恋人との約束を果たすために、幽霊(このときにはまだ死んでいなかったのかもしれないが)になって現れたのである。

“The Fair Maid of Clifton”はノッティンガムの話であるが、ここでは約束を破って他の男と結婚してしまった元恋人のところに男の幽霊が現れる。そしてどこかわからないところに女を連れ去ってしまうのである。

“Yorkshire Jack”(もとのタイトルは“An Execution and a Wedding”)もHuntが紹介しているコーンウォールの話であるが、ここでは女の方が先に夫を殺した罪で処刑されてしまう。その後その女の愛人であると噂された男のもとへ女の幽霊が悪魔と共に現れ、連れ去ってしまうという話である。

Childはこの話の成立過程として、話の中に韻文の歌(“The moon shines bright in the lift,/ The dead, they ride so swift,/ Love, art thou not afraid?/ How fear, when I am with thee”)といったようなもの)が含まれる散文の物語があり、それを中心にして前後の歌詞

が作られ、バラッドとして成立したのだらうと推測している<sup>13</sup>。

一方、MacCulloch によると、すべての物語は最初素朴な韻文の形で語られており、それが昔話の形に語り直されたと考えられてきたという。しかし、実際には韻文から散文に語り直されたものもあれば、最初から散文の形で語られた昔話もあっただらうといている。そして同じ話を語るバラッドと昔話を広く比較することによってこの問題を解決することができるだらうと述べている<sup>14</sup>。バラッドと昔話という韻文伝承と散文伝承の間をつなぐものとして、*cante-fable* という形態が考えられる。これは散文で語られた昔話の中に韻文の歌が織り込まれているものであるが、MacCulloch によるとこれはバラッドの一部を残して後を散文にしたもので、昔話の中の形式的なくり返しや、呪文の言葉、強調する部分が韻文で表されているものとは区別するべきだという<sup>15</sup>。Child があげている歌が含まれる昔話はいかにもこの *cante-fable* であるかのように思われるのであるが、成立過程から考えると、この場合は *cante-fable* ではなく、ふたりの印象的なやりとりの部分を韻文で表したものと考えた方がよさそうである。

イングランドのバラッドの場合、Child があげている歌に相当するフレーズは出てこないが、かなり洗練された印象を受けるのは確かである。また、イングランドの類話に関する限り、散文のものはすべてが実際の人名や地名と結びついて伝説として語られるのに対して、バラッドの方はタイトルにこそサフォークの地名がついているが、登場する人物はそれぞれ「農夫」(a farmer)、「娘」(a daughter)、「若者」(a young man) といったように不特定のものとして語られている。サフォーク州に散文の類話があったのかどうかまだ確認していないが、おそらく散文の伝説をもとに、昔話に近い不特定の話として語りなおしたという可能性が考えられそうである。ただし、バラッドの場合は Lüthi のような昔話に特有な語りの様式<sup>16</sup>を持つわけではなく、登場人物は生身の人間として描写されるし、心理描写なども行われ、表現形式は非常に現実的なものである。

## 2.2 “Fair Margaret and Sweet William”(Child 74)

このバラッドは主にブロードサイド・バラッドとして伝わっていたようであるが、Briggs はこれも幽霊にまつわる伝説として収めている<sup>17</sup>。あらすじとしては上で述べた伝説“The Fair Maid of Clifton”に似ているが、男女の立場が入れ替わっている。William と Margaret は結婚を誓い合うが、William は他の女性と結婚してしまう。Margaret は悲しみのあまり死んでしまい、その魂が新婚のベッドのところに現れる。一方妻は不吉な夢を見たという。William は死んだ Margaret に会いに行き、自分も悲しみに死んでしまう。死んだふたりは教会の離れたところに埋められるが、ふたりの体からバラとイバラが伸びて結び目を作る。

ここでは、William と Margaret という名前がでていますが、これはバラッドによく使われる決まりきった名称で、昔話でいえば Jack などにあたるものである。Briggs は伝説と

して分類しているが、昔話に近い特徴も持っているといえるだろう。

### 3.2 “Sweet William’s Ghost”(Child 77)

このバラッドは、Morokoff が A T 365 との関連を指摘しており、Briggs は幽霊に関する伝説として収めている<sup>18</sup>。また、モチーフ・インデックスでは E217“Fatal kiss from dead”、E311“Return from dead to return and ask back love tokens”という番号が与えられている。ある夜、Margaret のもとに恋人の Willy が訪れる。彼が死んだことに気づかない Margaret は彼に中に入ってキスをしてくれるよう頼むが、Willy は自分の誠実の誓いを返してくれと求める。Margaret が結婚を求めると、Willy は自分が死んだことを話す。Margaret は彼に誠実の誓いを返し、彼の後について墓まで行く。Willy の横に入れるかと聞かすが、棺はぴったりで入る隙間はないという。Margaret は自分も死んでしまう。

このバラッドでは、幽霊は自分の与えた誠実の誓いを取り戻しにやってくる。このような信仰は当時実際にあったようで、Child は Sir Walter Scott が *The Pirate* の広告の中で述べた逸話を紹介している。それによるとある男性と愛の誓いを交わした女性が、恋人が死ぬ前にロンドンまで行って会おうとしたという。ところが、ロンドンに着くと男はすでに死んでいて、女性は死体を一目見ることを求め、死体の手に触って、愛の誓いを取り戻したという。そうすることで幽霊の訪問を逃れることができると信じられていたのである<sup>19</sup>。

このように、このバラッドは死人の手に触れて死者の復活を妨げるという民間信仰に見られるように、死者が誓いを取り戻しにくるという信仰を語っており、テーマとしては、伝説に近いといえるだろう。Briggs もこのバラッドも伝説に分類している。また、Taylor は死んだ恋人が戻ってくるという点は語られているが、A T 365 とそれ以上の類似は認められないといっており、さらにこのように短い話は信仰との区別が難しいし、伝説に近いと述べている<sup>20</sup>。しかし、見方を変えれば、語りの形式としては前述の“Fair Margaret and Sweet William”と同じく話としては昔話に近い特徴を持っているといえる。

またこのバラッドにはスカンジナビアに多くの同型のバラッドがあるが、そこでは恋人の幽霊が現れる理由として、生き残った恋人が悲しみすぎるためであることが述べられているという<sup>21</sup>。このモチーフは次に述べる“The Unquiet Grave”と共通するところが多い。

### 2.4 “The Unquiet Grave”(Child 78)

このバラッドも Morokoff が A T 365 との関連を指摘しているが、Briggs は幽霊に関する伝説に分類している。モチーフ・インデックスでは E217“Fatal kiss from dead”、E361“Return from the dead to stop weeping”が当てられている。Child の選集では A が

らDまで4つのバージョンがあげられているが、そのうちAとDでは死んだのは女性、BとCでは男性である。恋人が死んでから残されたものは1年間の間悲しみ、嘆き続ける。そうした恋人のもとに死者の幽霊が現れ、そんなに嘆いていては静かに眠れないと言って話しかける。現れた恋人を見て、残されたものはもう一度キスをしたいと言うが、幽霊はキスをするとあなたも死んでしまうと行って相手をたしなめる。

ここでは、幽霊は残されたものが死者のことを嘆き悲しみすぎないようにと注意を与えるために現れる。死者に対する過度の悲しみが死者の休息を妨げるといふこの考えは全スコットランドで広く見られると Sir Walter Scott が述べているし、イングランドやアイルランドにも認められるという<sup>22</sup>。Child はその他にもヨーロッパを中心に多くの伝承をあげており、生者の涙が死者の経帷子を濡らす例や、涙が天国への橋を通れなくしてしまう話などがあげられている。

Taylor はこの話と AT 365 との関連について、死者の帰還は語っているが、話型としてはほとんど無関係であろうと述べている。そして物語としては Child もあげているグリムの「きょうかたびら」(KHM109)の類話と考える方が適切であろうという<sup>23</sup>。

グリムの話では、7歳で死んだ男の子のことを母親はどうしてもあきらめることができず、昼も夜も泣いている。やがてその子どもが夜中に姿を現すようになり、母親が泣くと子どもも泣く。そして朝になると姿を消す。母親が泣くのをやめないで、子どもはきょうかたびらを着てやってきて言う。母親が泣くのをやめないと、棺の中でよく眠ることができないし、母親の涙がきょうかたびらの上に落ちてかわく暇がないと。それを聞いた母親は泣くのをやめ、次の晩に現れた子どもは、自分の経帷子はすぐかわき、ゆっくり休めると言い、それ以来現れることはなかった。

恋人同士の話ではなく、母親と子どもの話になっているが、話の主題や筋の展開はほとんど同じである。

こうしてみると、このバラッドも民間信仰を語っているものであり、テーマとしては非常に伝説的である。ところが、その内容を見ると、Child があげている他の類話では人名が述べられているものが多いのに、バラッドの方では登場人物の名前は明かされないし、特定の地名などと結びついてもない。その点はグリムの「きょうかたびら」も同じである。ここでも前述の3つのバラッドと同じように、伝説的なテーマを不特定の登場人物の話に置き換えて、昔話的に語っているということがいえるだろう。しかし、バラッドでは、昔話のように筋を語るのではなく、物語はずっとふたりの恋人同士の対話で展開する

## 2.5 “James Harris (The Daemon Lover)”(Child 243)

このバラッドについて Morokoff は、Child が頭注に昔話の類話をあげているが、疑わしい例であるとしている<sup>24</sup>。ところが、このバラッドについて Child はそれぞれのバージョンの比較はしているが、特に昔話の類話はあげていない<sup>25</sup>。これは Taylor も指摘し

ているとおりである<sup>26</sup>。

ストーリーは、Jane は James Harris と結婚を誓うが、James は海へ出ていき、3年後に死んだという知らせが入る。その後船大工が Jane に求婚し、ふたりは結婚する。4年たったある夜、夫の留守中に James Harris の幽霊が現れ、誓いを守るように求める。Jane は最初夫と子どもがいるのでと言って断るが、James がすばらしい7隻の船を連れて来ているという話を聞いて一緒に行く気になる。妻が行ってしまったことを知った夫は自ら首をくくって死んでしまう。

Child はこのバラッドについて、A から H まで8つのバージョンをあげているが、そのうちふたりが結婚を誓い合い、男が海へ出ていき、死んだという知らせが入り、女が再婚するところを語っているのはAのバージョンだけで、後の B から F は女の元に幽霊が現れるところから語られており、G と H は断片で最後の部分だけが残っている。

このバラッドが前の4つと違っているのは題名に“The Daemon Lover”というもう一つのタイトルがあげてあるように、現れる幽霊がなくなった元恋人の名前を名乗っているが、それが後で悪魔だったとわかるバージョンが含まれていることである。元の題名では、バージョンの E、F、G が “The Daemon Lover” になっている。例えば、E のバージョンでは “It’s then she spied his cloven foot” (E 11)、F と G では “she espied his cloven foot”、(F 11、G 7) というように娘が男の足が蹄のように裂けていることに気がつくところが語られている。“Show the cloven hoof” というのが英語の表現で「(悪魔が)本性を表す」という意味であることからわかるように、悪魔であることがわかったということを表している。

語りの形式を見てみると、Aバージョンでは Jane Reynolds、James Harris、Cバージョンでは James Harris、Jeanie Douglas というふたりの名前が出てくるが、その他のバージョンでは登場人物の名前は出てこない。Child はBからHのバージョンは、ブロードサイド版のAを元にして<sup>27</sup>と述べているので、このバラッドに関しては伝説をバラッドの形で語ったブロードサイドバラッドが最初にあり、それが口頭伝承に入り込んで歌われる間に、不特定の男女の話、それから女を連れにきた悪魔の話へと変化していった可能性が考えられそうである。

### 3. 子どもの幽霊

子どもの幽霊が現れる話には、自分が殺してしまった子どもの話と、自分が知らない間に死んでしまった子どもの話がある。まずは、自分が殺してしまった子どもの幽霊が現れる話から見ていくことにする。

### 3 . 1 “ The Cruel Mother ” ( Child 20 )

このバラッドについて、Morokoff は Child が昔話の類話について述べているが、対応する話型がないものとしている<sup>28</sup>。Taylor によれば、Siuts は伝説 ( Sagen ) に同話型を求めているとしている<sup>29</sup>。また Briggs はこのバラッドの C バージョンを幽霊の伝説に、D バージョンをノベレ ( 魔法の要素を含まない昔話 ) にあげている<sup>30</sup>。そして、C バージョンの方は Christiansen の伝説の型 ML4025 「洗礼を受けずに死んだ子どもの幽霊が洗礼を求めたり、母親への復讐を求めるのが聞かれる」<sup>31</sup>と一致するとし、対応モチーフとして E412.2 “ Unbaptized person cannot rest in grave ” をあげている。一方 D バージョンの方はモチーフ S.12.2 “ Cruel mother kills child ”、E.225 “ Ghost of murdered child ” をあげている。そして両者は同じ話であるが、少し強調点が違うとしている。洗礼を受けずに死んだ子どもの運命に話の中心があるものと、罪を犯した母親に罰を与えるために現れた幽霊に焦点を当てたものとを区別しているのである。Thompson の *Motif Index* では E.225. “ Ghost of murdered child ” のところに Child のこのバラッドへの言及がある。

Child の選集には A から M まで 13 のバージョンがあげられている。ある女性が結婚前に子どもができてしまったので、密かに殺してしまう。その後子どもがボール遊びをしているのを見かけたので、「この子たちが私の子だったら、上等の服を着せてやるのに」などと言ったところ、子どもたちはその女性が殺した子どもの幽霊であることが明らかになり、幽霊は女性に対する罰を宣告する。

この話では、子どもの幽霊は母親の殺人を暴露し、それに罰を与えるために現れる。このバラッドの類話として Briggs があげているのは “ Short-Hoggers of Whittinghame ” と “ Puddlefoot ” の 2 話であるが、いずれも ML4025 「洗礼前に死んだ子ども」に関する話の類話としてあげている<sup>32</sup>。

“ Short-Hoggers of Whittinghame ” は幽霊の伝説に分類されるスコットランドの話である。Whittinghame の村はずれでひとりの母親が洗礼前の子どもを殺したため、その幽霊が村に現れ、村人を悩ます。名前のない人間はあの世で落ち着けないという信仰があったので、それが原因だろうということはわかってても村人は幽霊を怖がって近づくことができない。ある日、ひとりの酔っぱらいがその幽霊に出会い、酒の勢いもあって「やあ、Short-Hoggers よ、元気かい」と呼びかけたところ、幽霊は名前をもらったといって喜んで姿を消し、それ以来現れなかったという話である。Short-Hoggers というのは「すり切れた靴下」というような意味で、長い間歩き回って靴下の足の先がなくなってしまった幽霊のことを指しているのだという。

この伝説では話の前半が “ The Cruel Mother ” と同じ主題であるが、話の中心はむしろ後半の名前を付けられる前に死んでしまった子どもが幽霊になって現れ、名前を付けて



もらったことで現れなくなった点にあるように思われる。

もうひとつの“Puddlefoot”の話は妖精の伝説としてあげられている。ここで語られるのは家の片づけなどをしてくれるブラウニーの話である。近くの農民たちはそのブラウニーのことを、小川で水浴びする様子から Puddlefoot（水たまりの足）とひそかに呼んでいたが、面と向かってそう呼びかけるものはいなかった。ある日酔っぱらった男がその名前で呼びかけたところ、ブラウニーは名前ができたと喜んで姿を消し、それ以来現れなかったという話である。妖精の起源としては様々な説があるが<sup>33</sup>、ここでは洗礼前に死んでしまった子どもが妖精になるという考え方が現れている。

確かに“*The Cruel Mother*”の一部のバージョンはこれらの洗礼前に死んだ子どもの伝説と関連づけられるかもしれないが、バラッド全体としては子どもを殺してしまった母親を罰するために現れる幽霊の話と考えた方がよさそうである。

さて、このバラッド（の一部）と対応する伝説の方では、実際にその幽霊が現れた地名が述べられている。一方バラッドの方では、London（D）、Lurk（E）、Edinburgh（フリフレイン）、New York（I）、Malindie（J）と地名があがっているものもあるが、地名が述べられないものも多い。また、殺人を犯した母親の名前についてはIのバージョンでは the minister's daughter of New York と述べられており、特定の人物と結びついているようであるが、それ以外はKのバージョンで Lady Margaret と述べられているほかは単に she、a lady とだけ述べられている。ここでも、元は伝説であった話かもしれないが、バラッドとして語られるときは昔話的になっているものが多い。ただ、どのバージョンが元の形でそれがどのように変化していったのかはもう少し詳細に調べてみないと明らかにはできない。

### 3.2 “*The Wife of Usher's Well*” (Child 79)

このバラッドは Morokoff が用いた *The Types of the Folk-tale* の 1928 年版（FFC74）には記述がないが、1961 年の改訂版では話型 769「死んだ子どもの両親の元への好意的な帰還」に Child のこのバラッドへの言及がある。ただし Child はこのバラッドについては昔話の類話はあげていない。Baughman の *Types and Motif Index of the Folktales of England and North America* にはこの話型にあたる話として、イングランドと、アメリカに 3 話ずつ話があげられているが、残念ながら現物にあたることはできなかった。Briggs はこの話を幽霊に関する伝説のところにあげて、モチーフとしては E.386.2“*Ghost summoned by charm*”、E.361“*Return from dead to stop weeping*”、E.422.4.1“*Revenant wears hat of birch*”、E.587.3“*Ghosts walk from curfew to cock-crow*”をあげている。

ひとりの未亡人が Usher's Well に住んでいた。彼女は 3 人の息子を海に出すが、1 週間もしないうちに息子たちが死んだという知らせが入る。彼女は息子たちが生きた姿で戻ってくるまで海が荒れておさまらないようにと祈る。聖マルタンの祝日に息子たちが戻っ

てくるが、かぶっていた帽子は天国の門にしか生えないというカバの木でできていた。母親は息子たちをもてなす準備をするが、鶏が鳴くと息子たちは姿を消してしまう。

Ashliman はこの話型 769 の類話としてグリムの「くすねた銅貨」(KHM154) をあげている<sup>34</sup>。この話は生前に母親から貧しい人にやるようにと銅貨をもらった子どもが自分のお菓子を買うために床板の隙間に隠しておいたのだが、そのまま死んでしまい、それが心残りで探しに出てくるという話である。子どもの幽霊という点では共通しているが、話の内容としてはかなり違うように思える。

### 3.3 “Sir Hugh, or The Jew’s Daughter” (Child 155)

このバラッドは Mofokoff がロマンスや伝説と共通するモチーフを持つものであると指摘している。Child の選集には A から R まで 18 のバージョンがあがっている。物語は Lincoln (Mirryland town, Maitland town, Merrycock land, Scotland) の少年 Sir Hugh (Saluter, Harry Hughes) がボールで遊んでいると、ボールがユダヤ人の家の窓を割って中に入ってしまう。ボールを取りに行くと、ユダヤ人の娘は家の中へ入るように誘い、少年を殺してしまう。息子が夜になっても帰らないので母親は探しに行く。「いたら話しかけてちょうだい」と言いながら探していると、ユダヤ人の家の井戸まで来たときに息子の声が聞こえる。「お母さん、うちへ帰って経帷子の用意をしてください。明日の朝リンカーンの町外れでまた会いましょう」と言う。町外れへ行くと、死体が彼女の前に現れる。男の子のために町中の鐘がひとりでに鳴り、町中の聖書がひとりでに読まれる。

Child の記述を見るとこのバラッドと共通する話が、イングランドだけでなくヨーロッパ各地の様々な年代記に見られるようである。イングランドでは 1255 年にリンカーンの少年 Hugh がユダヤ人に連れ去られ、イエス・キリストのように十字架にかけられて殺され、罪を犯したユダヤ人たちは罰せられたという記述があり、同じ事件のことが複数の文献に現れている。同時代のイギリス系フランスのバラッドがあり、事件とほぼ同じ内容を語っているようである<sup>35</sup>。

実際にユダヤ人がキリスト教徒に対して殺人を犯したことがあったのかどうかは疑問であるが、ユダヤ人にこうした殺人の罪が着せられて罰せられるという事件は数多くあったらしい。それにともなって、ユダヤ人は恐ろしいというイメージを与えるような伝承も数多く残っているようである<sup>36</sup>。Child はこのような傾向が決して過去のものではなく、19 世紀になってからも多くの事例が見られると嘆いているが、現代においてもユダヤ人に対してだけでなくこうした偏見や差別意識は人々の心の中で生き続けており、実際の事件につながるまでも、伝承の中にそれが見え隠れすることも少なくない。民間伝承がそうした残酷な一面を持っているということは否定できないが、それを公にする場合には細心の注意が必要であろう。

イギリスの文献としては、14 世紀に書かれた Chaucer の *The Canterbury Tales* の「尼

僧院長の物語」<sup>37</sup>にも同じような話が語られている。ここではアジアのある町の話になっているが、ひとりのキリスト教徒の少年がユダヤ人街を歩いているときに聖母マリアを讃える歌を歌っていたため、ユダヤ人に捕まえられて喉をかき切られて殺されてしまう。母親が少年が投げ入れられた穴の近くまで行くと、少年がマリアを讃える歌を歌うのが聞こえる。聖母マリアが少年の舌の上に置いた種のおかげで、喉をかき切られて死んでからもずっと歌い続けていたのである。種を取り除くと少年は静かに息を引き取り、殉教者として埋葬される。そしてこの話の後にはリンカーンのヒューの話が言及されている。

このバラッドが語っているのは実際にあった事件に基づく伝説である。ところが、記録に残る最も古いイングランドのバラッドは18世紀半ばのものであり、事件から500年の間に話の細部がかなり変化している<sup>38</sup>。年代記ではキリストを侮辱するかのよう複数のユダヤ人たちによって十字架にかけられるのだが、バラッドでは家の窓を割ったため、ユダヤ人の娘によって殺されることになっている。また、年代記では話の後半に少年の死体に触れた者たちが癒される（例えば盲目の女性の目が見えるようになるなど）というエピソードが語られ、宗教的な伝説になっているが、バラッドの方ではそうした奇蹟には触れられず、少年が井戸の底から話しかけ、幽霊（死体）が現れるという話になっている。ここでの幽霊は *revenant* というよりは、死んでから埋葬される前の死体といった方がふさわしい。元の伝説がバラッドとして伝承される間に、バラッドが好むような形に変化していったものであろう。

#### 4. その他の幽霊の話

その他の話としてあげられるのは、兄弟姉妹が幽霊となって現れるものである。

##### 4.1 “Proud Lady Margaret” (Child 47)

このバラッドは、Briggs が幽霊に関する伝説としてあげており、対応モチーフとしては E.226.1 “Dead brother reproves sister’s pride”, E.363.3 “Dead warns the living” をあげている<sup>39</sup>。このうち前者については *Motif-Index* にも言及がある。Child はこのバラッドについて A から E まで 5 つのバージョンをあげているが<sup>40</sup>、Briggs があげているのはそのうちの E バージョンである。裕福な娘 Lady Margaret の元にひとりの男が求婚者として現れ、「結婚できなければ死んでしまう」と言うが、娘は「今までに私のために死んだ男は大勢いる」と言う。娘は謎を掛けて男を試すが、男がすべての謎に正しく答えため、娘は男を自分の夫にふさわしいと認めざるを得ない。娘が自分の家が裕福であることを自慢し始めると、男は自分が娘の死んだ兄であることを明かし、妹が高慢であることを戒めに来たのだと言う。E バージョンではこのうち謎かけの部分がなく、現れた男が

すぐに正体を明かし、妹をたしなめる形になっている。

Child は、この話はふたつのバラッドが合わさったもので、前半の謎かけの部分は昔話にでてくる謎を掛ける残酷な姫の話からきたものであろうとしている<sup>41</sup>。(バラッドにはこのような謎かけの話が非常に多いが、これについてはまた稿を改めて論じたいと思う。)そして、後半が幽霊の話であり、ここでは、高慢な妹のことが心残りで、妹をたしなめるためにでてくることになっている。

このバラッドでも、Briggs は伝説に分類しているが、登場人物はバラッドによく現れる Lady Margaret あるいは無名であり、話としては昔話的である。しかし、その語り口は娘と男(兄の幽霊)の対話の形で進められ、バラッドの特徴がよく現れている。

#### 4.2 “Young Benjie”(Child 86)

このバラッドは Morokoff によると、Child は類話をあげているが、疑わしい例であるという<sup>42</sup>。Taylor は、このバラッドは殺された人間の死体が事件を物語るという信仰に基づくものであるが、Child は関連する話をあげていないとしている<sup>43</sup>。

このバラッドは“Sir Hugh and Jew's Daughter”と同じく revenant のバラッドというよりは、死んでから埋葬されるまでの死体が話すという話である。Marjorie は恋人の Young Benjie と喧嘩して他の男を見つける。そして Young Benjie が訪ねてきても追い返してしまう。しかし後悔して再び Benjie の元へ行くのだが、彼は彼女を川に投げ込んで殺してしまう。娘の兄たちが妹を見つけて引き上げる。通夜の時、死体が兄たちに話しかけ、犯人は Young Benjie であると告げ、その罰を言い渡す。

Child はこの話の類話としてデンマークのものらしい類話をひとつあげているだけである。そしてその後に Scott の解説を紹介している。それによるとスコットランドでは通夜で死体と夜を過ごすことに関する迷信が広く見られるという。特に知られているのが、ドアを半開きにしておくと死体から魂が抜け出て飛び回るというもので、それに関する話も1話紹介している<sup>44</sup>。このバラッドでもAバージョンの15スタンザに“Wi doors ajar”という箇所があるので、Marjorie の死体が話をしたのはそのためだと考えられているだろう。

ここでは、民間信仰に関連した伝説がバラッドの形で語られているといえるだろう。

#### 5. おわりに

以上昔話との関連性が見られる revenant ballad について見てきた。成立としては、伝説や昔話が先にあり、そこからバラッドが生まれたというものが多いうように思われる。また、バラッドではこの幽霊の帰還という非常に伝説的な主題が不特定の人物について語ら

れ、話としては昔話的な特徴をもっていることがわかった。ただし、その語り口は昔話のように中身を抜いて筋を語るのではなく、現実味をおびた人間を登場させ、その対話の形で語られる（歌われる）ことが多い。また、筋を追って語るのではなく、物語の特徴的な場面を特に取り出してそれ以外の部分は聞き手の想像にまかされることも多い。今回は類話の紹介やそれとの比較にとどまり、その表現方法まで詳しく見ることはできなかったが、また機会があればそちらの方も詳しく見てみたいと思っている。

また、David Buchan は Propp の形態論に倣って、“tale role” という概念を用いて revenant ballad を分類しようと試みている<sup>4 5</sup>。登場人物（の役割）として REVENANT と VISITED しか現れない Group （Child 20, 79, 47, 77, 78）と、REVENANT、VISITED のほかに UPHOLDER、OPPOSER、PARTNER が現れる Group （Child 69A F、G、77B、F、272A、74A、243A、C など）に分けてそれぞれ分析を加えている。バラッドを構造的に分析しようという試みのひとつとして興味深いものであり、従来のお話型とは異なるグループ分けが行われている。ほかにもバラッドを Propp の形態論を用いて分析しようという試みは行われているが<sup>4 6</sup>、これもまた機会があれば稿を改めて扱いたいと思っている。

#### 注

- 1 . Wimberly, Lowry C. *Folklore in the English and Scottish Ballads*. Constable, 1959.p.225-269. Buchan, David. “Tale roles and Revenants: A Morphology of Ghosts” *Western Folklore*, vol.45 (1986), pp.143-160.p.145.
- 2 . Würzbach, Natascha and Simone M. Salz. *Motif Index of the Child Corpus*. Berlin:Walter de Gruyter, 1995. p.26
- 3 . 拙論「チャイルド・バラッドと昔話」『英語学英米文学論集（奈良女子大学英語英米文学会）』第 17 号（1991） Pp.47-57.参照。
- 4 . 拙論「バラッド“Twa Sisters”と昔話“Rose Tree” - 英国における殺人露見の物語」(未公刊)
- 5 . Aarne, Antti and Stith Thompson. *The Types of the floktale; a classification and bibliography*. 2<sup>nd</sup> ed. ( FFC184 ) Helsinki, 1964. p.127.
- 6 . 拙論「チャイルド・バラッドと昔話」 p.50、 p.52。
- 7 . 残念ながら、Bürger のテキストは参照することができなかったが、Child, Francis James. *The English and Scottish Popular Ballads*. 5vols. Boston, 1882-98. vol.5, p. 60 によれば、Bürger は低地ドイツの話をもとにしており、イングランドの“The Suffork Miracle”のバラッドを参照した可能性もあるという。
- 8 . Child, vol.5, p.59、 p.63。

- 9 . Briggs, Katharine M. *A Dictionary of British Folk-Tales in the English Language*. 4vols. London: Routledge and Kegan Paul, 1970-71.pt.B, vol.1, pp. 586-587.
- 1 0 . *Ibid.*, pp.526-527、pp.577-578、pp.449-450、pp.603-604。そのうち“ The Lovers of Porthangwartha”、“ The spectre Bridegroom”、“ Yorkshire Jack”は Robert Hunt *Popular Romances of the West of England* . New York: Benjamin Blom, 1968 [1916]のそれぞれ pp.247-8、 pp.233-239、 pp.256-258。
- 1 1 . Hunt, p.239。
- 1 2 . ハロウィーンは、古いケルトの暦では現在の大晦日にあたり、各地で新しい年を迎える行事が行われた。その中に新しい年の運勢を占うような俗信も多く伝わっており、恋人同士の将来を占う遊びもよく行われたようである。(Kightly, Charles. 『イギリス祭事・民俗事典』 大修館書店 1992。 pp.185-186)。
- 1 3 . Child, vol.5, p.60、 p.63。
- 1 4 . MacCulloch, J. A. *The Childhood of Fiction: a study of folk tales and primitive thought* . London, 1905。 p.479-482.
- 1 5 . *Ibid.*, p.480.
- 1 6 . Max Lüthi 『ヨーロッパの昔話』小澤俊夫訳 岩崎美術社 1969 によれば、昔話に登場する人間や動物には「平面性」という性質が見られ、肉体的、精神的深さが欠如しているという。
- 1 7 . Briggs, pt. B, vol.1, p.451.
- 1 8 . *Ibid.*, p.588.
- 1 9 . Child, vol.5, p.227.
- 2 0 . Taylor, Archer. “The parallels between ballads and tales” *Jahrbuch für Volksliedforschung*, vol.9(1964), pp.104-115., p.108、 p.114
- 2 1 . Child, vol.5, p.228.
- 2 2 . *Ibid.*, vol.2, p. 234-235.
- 2 3 . Taylor, p.108.
- 2 4 . Morokoff, Gene E. “Whole parallels of the Child ballads as cited or given by Child or in FFC 74” *Journal of American Folklore* , vol.64(1951), pp.203-6. p.205.
- 2 5 . Child, vol.4, pp.360-362.
- 2 6 . Taylor, p.110.
- 2 7 . Child, vol.4, p.361.
- 2 8 . Morokoff, p.205
- 2 9 . Taylor, p.106、 Siuts, p.80
- 3 0 . Briggs, pt.A, vol.2, p.397, pt.B, vol. 1, p.433.
- 3 1 . Christiansen, Reidar Th. *The Migratory Legends: a proposed list of types with a systematic catalogue of the Norwegian variants*. Helsinki, 1958 p.65.

- 3 2 . Briggs, pt. B, vol. 1, p.345, p.566.
- 3 3 . Briggs 『妖精事典』平野敬一 [ほか] 共訳 富山房 1992 によると、死者とみなすもの、より原始的な先住民とするもの、樹木や自然の精霊であるとするもの、墮天使とするものなどがある。死者とするものの中には、異教徒の死者、洗礼を受けずに死んだ子どもの死者などの例があげられている。
- 3 4 . Ashliman, D.L. *A Guide to Folktales in the English Language*. New York: Greenwood, 1987.
- 3 5 . Child, vol.3, pp. 235-243.
- 3 6 . *Ibid.*, pp.240-241.
- 3 7 . Chaucer, Geoffrey. 『カンタベリー物語』榊井迪夫 中巻 岩波書店 1995。pp.345-358。
- 3 8 . Child, *op.cit.*, p.239.
- 3 9 . Briggs, *A Dictionary of British Folktales.*, pt. B, vol. 1, pp. 557-559.
- 4 0 . Child, *op.cit.*, vol.1, pp. 425-431.
- 4 1 . *Ibid.*, pp. 425-426. この話は、このバラッドの前に収められている “ Captain Wedderburn’s Courtship ” ( Child 46 ) の類話としてあげられている。
- 4 2 . Morokoff, p.206.
- 4 3 . Taylor, p.109.
- 4 4 . Child, *op.cit.*, vol.2, p. 281.
- 4 5 . Buchan, David. “ Tale Roles and Revenants: A Morphology of Ghosts ” *Western Folklore*, 45(1986), pp. 143-60.
- 4 6 . たとえば、David Buchan. “ Propp’s Tale Role and a Ballad Repertoire ” *Journal of American Folklore*, vol. 95(1982), pp. 159-72、Judith W. Turner. “ A Morphology of the ‘ True Love ’ Ballad ” *Journal of American Folklore*, vol. 85(1972), pp. 21-31 など。

#### 参 考 文 献

(注にあげたものはのぞく)

- Baughman, Ernest W. *Type and Motif-Index of the Folktales of England and North America*. The Hague: Mouton, 1966.
- Grimm, Jakob and Wilhelm Grimm. 『完訳グリム童話集』第3巻 高橋健二訳 小学館 1985。
- 石井明 『幽霊はなぜでるか』平凡社 1998
- Propp, Vladimir 『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳 白馬書房 1983。

新保弼彬「ビュルガー」の項『日本大百科全書』第19巻 小学館 1988。

Siuts, Hinrich. "Volksballaden – Volkserzählungen: Motiv- und Typenregister" *Fabula*, vol.5 (1962), pp.72-89.

Thompson, Stith. *Motif-Index of Folk-Literature*, 6vols. Bloomington: Indiana Univ. Press, [1955].

(1999年2月26日受理)